

山路の露注釈 (三)

西 木 忠 一
池 田 良 子

凡 例

- 一、本稿は『統群書類従』巻第五百十(物語十)『山路の露』を注釈したものである。
- 一、『統群書類従』本は全編区切らず書き続けてあるが、内容上から適宜段に分け、各段ごとに見出しを付した。
- 一、本注釈は、本文・通釈・語釈・補記の四項より成る。
- 一、本文は読解の便宜を考え、適宜次のような工夫を加えた。
- (1) 仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した。
- (2) 時には仮名書きの語を漢字に、漢字書きを仮名に改めた。
かほる↓薫 せうと↓兄人
猶↓なほ 其比↓そのころ
- (3) 句読点を付し、送り仮名を補った。

- (4) 反復記号はもとの文字にもどした。
中々↓なかなか
- (5) 会話や消息の部分は「」で示した。
- 一、甚しい本文異同のある場合は補記の項で触れた。なお、その項における「第一類本」(主として「刊本系」)「第二類本」(主として「写本系」)の呼称は、本位田重美氏(『源氏物語外篇 山路の露 第一類本 第二類本』)のそれを踏襲したものである。
- 一、補記の項で明示した諸作品の本文は『新潮日本古典集成』によった。なお、上記以外の場合はその都度明記した。

七 山 陰

大将の君、日ごろ少しわづらひ給ひけるを、母宮などおぼし騒さわぎて、いとどもの騒がしかりけるまぎれに、かしこのこともおぼつか

なくて、日ごろになりぬ。よろづこちたき御いのりのしるしにや、ことなることなくて怠り給ひぬれど、なほなごりなやましきさまにことつけ給ひて、いづくにも御ありきなどはし給はず。のどやかなる屋つ方、わが御かたにながめふし給へるに、かのゆかりの童まるれり。近く召し寄せて、「なやましうしするほどは、人目しげうむづかして、この行く方知らねばいといぶせきにも、ただいまこれよりすぐに行けよ。このたびだにもうひうひしくて帰り来なば、いみじういふかひなからん」とて御文給はり、駒うち早めて急ぎけれども、日たけて出でたりければ、山陰暗うなるほどにぞ行きつきぬる。

〔通釈〕

大将の君(薫)は、ここ暫くわずらっておられるのを、母宮などがお騒ぎなされて、ひどく騒々しかったのにまぎれて、小野の(浮舟の)ことも気がかりなままに、数日が過ぎて行った。何かにつけてものものしい御祈禱の効き目であるうか、(薫は)特別なこともなくて回復なされたが、やはり病後の養生にかこつけて、どこへもお出かけなどはなさらぬ。のどかな屋のころ、自分の住まいでお休みなさっているところへ、あの(浮舟)ゆかりの童(小君)が参上した。(薫は童を)近く呼び寄せて、「私が臥っていた頃は、人目が多くて手が打てなかったが、お前の行方を知らなかったので、ひどく気がかりであった。たつた今すぐに(小野へ)行っておくれ、今回の使いさえも慣れなくて帰って来たならば、全く甲斐のないことだろう」と(おっしゃって、浮舟への)文を賜わり、(そこ

で小君は)馬を走らせて急いだけれども、日が高く昇ってから出発したので、山陰が暗くなるころに(小野に)到着したのであった。

〔語釈〕

○母宮——薫の生母「女三の宮」。朱雀院第三皇女、母藤壺女御。十三、四歳にて六条院に降嫁、翌年春の六条院の蹴鞠にて柏木に姿を見られた。この時より彼女の人生大きくかわり、柏木の子(薫)を秘密のうちに出産したのが二十歳ころ、続いて出家を果した。

○かしこ——浮舟がひっそり暮らしている「小野」。

○こちたし——大げさである。「ゆく先の御頼め、いとこちたし。」

〔源氏物語・夕顔の巻〕

○かのゆかりの童——浮舟ゆかりの童で、「小君」のこと。「山道分くる御つかひ」(六煩悶の段)と見える。

○うひうひし——ものごとくに慣れていない様子を「うひうひし」という。「まだうひうひしきほどなる新参などは、つましげなるに」(枕草子・二六〇段)。なお、本注釈「二焦慮」の段に、「されどただ同じさまに、うひうひしてのみ帰り参れば、」と見えただを受けて、本段では「このたびだにも」とする。

〔補記〕

①「このたびだにもうひうひしくて」の箇所を、第二類本は、「此たひたにもうとくしくて」とする。「うひうひし」と「うとうとし」では前者がより相応しい。後者では「年ごろはうとうとしきやうにて過ぐしたまひしを」(源氏物語・手習の巻)のごとく、

よそよそしさ・冷淡さが表われるからである。

また、「いみじういふかひなからんとて御文給はり」を、第二類本は「いみじういふかひなからんとて、文たまへり」とする。

底本は、「給はり」で次に続くが、第二類本は「たまへり」で文が切れる。かつ、「貰う・受ける」意の敬語と、「目上から目下に与える」意の敬語との相違がある。

②金子元臣氏(『定本源氏物語新解』)は、薫の会話の部分を一「只今これよりすぐに行けよ。この度だにも初々しくして返り来なば、いみじういふかひなからむ」と解している。だが、池田龜鑑氏(日本古典全書『源氏物語』七・「古本山路の露」)が、「なやましようしつる程は、人目しげくむつかしう、この行く方知らねばいといぶせきを」を加えて解されている。後者に従うべきであろう。

③小野の浮舟のことは思い続けていたものの、病いには勝てなかつたのであろう。薫は数日を過ごしてしまう。どこへも出かけず自邸で養生する薫のもとへ、小君が参上した。いまの薫に出来ること、それはせめて浮舟に「文」を遣ることだけである。折良く参上した小君に、薫は早速文を持たせてやる。小君は「駒うち早めて急ぎけれども」と、彼がいかに一騎で小野へ馳せたごとくであるが、実は大勢の従者が伴われていた。それはこの日の夜の小君下山の条(十一段)を見れば判明するところである。物語はすぐに薫を小野へ赴かせない。まず彼を病臥させておいて代人を遣る。その後、いずれは彼も小野へ向かうことであろう。

八 簀 子

かしこには、例のまぎるるかたなくながめ給ふほどなるに、あなたより来て、尼君に「かく」などさきめき聞こゆれば、思ひかけぬ程にもおどろき給ひて、「なほみづから聞こえ給へ。ことごとしかるべき人にもおはせざるを、さのみ出だしはなちきこえ給ひて、いかに物しとおぼすらん」と、いとほしがりて、「あさましうみるめにあかめ御つれなきなりや」と、口口にいふも、いと苦しとおぼしたり。まここには例の「こなたに」といはせれば、歩み出でて、簀子の端つ方についでたり。尼君ゐざり出でて、「たびたびかう山道わけ給ふ御しるしなくてやと、ふるめかしきさしすぎ心、とりどりかたはら痛く思ひ聞こえ侍る。いかなるにか、たれにも見え知られ給はんことを、わづらはしうおぼえためれば、見たてまつりわづらひ侍る」とのたまへば、「このたびさだかなる御かへりなくては、帰りまゐるまじうなん承り侍りつる」といふさまも、いとらうたげなり。

〔通釈〕

小野の里では、(浮舟が)いつものごとく物思いのまぎれることがなくて沈んでおられる時だというのに、あちらから人が来て、尼君に小声で「こうしたことが……」と申し上げたので、(尼君は)思いもかけぬ時にと驚かれて、(浮舟に)「やっばりご自身でお会いなさい。大げさにお迎えせねばならぬ人でもなさそうですのに、そ

んなにすげなくさって、先方ではどんなに不愉快にお思いでしょう」と、気の毒に思つて（対面をすすめ、また女房達が）「嘆かわしく、そばで見つていて嫌になるほどの冷たさですこと！」と口ぐちにいうのも、（聞いている浮舟は）辛いことだと思ひになる。（尼君は）心からいつものごとく「こちらへ」と（女房をして）いわせたので、（小君は）歩み出て、簀子の端にかしこまって座っている。尼君がいざり出て来て、「何度も何度もこの山道を分けてお出かけくださる甲斐もなくはと、年老いた者の出すぎた心に、あれこれと居辛く思つております。どういふわけか、（女君は）どなたともお会いなさることを、一面倒なことと思ひのようですので、（私も）そばで見つていて気にいたしております」とおっしゃると、（小君は）「今度ばかりは確かな御返事をいただかなくては、帰つて来てはならぬと承つております」といふ様子は、大層愛らしい。

〔語釈〕

○かしこ——浮舟が隠れ住んでいる「小野」をさす。

○ことごとしかるべき人——心をつくしてお迎えしなければならぬい客人。

○出だしはなち（つ）——冷淡に対処する（あしらう）。

○簀子——殿舎の廂の外に、竹や細い板をいささか間をあけて張り、雨や露がたまらぬように工夫した縁、つまり「濡れ縁」。

○ふるめかしきさしすぎ心——「さしすぎ心」は程度が越える、度が過ぎる心の意で、年寄りのお節介をいう。

○さだかなる御かへり——「さだかなり」（形容動詞）は事実とし

て明確であるさまをいい、ここでははっきりした、浮舟の薫への返事をいう。

〔補記〕

①「わづらはしうおぼえたれば」の箇所を、第二類本は「つゝましようおほしたなれば」とする。「わづらはしう」と「つゝましよう」では、「おぼ」した人物の感情ががらりと変わつてしまふ。この時点での浮舟は前者が相応しい。

②尼君は小君を「簀子の端つ方」に招じ入れて、彼と対座した。まずは小君は尼君と語り、その後に見えず姉（浮舟）と対座する段取りである。尼君は以前にも小君と応対していた。それは『源氏物語』夢の浮橋の巻に詳しい。

(1)あやしけれど、（妹尼）「これこそは、さは、たしかなる御消息ならぬ」とて、（妹尼）「これこそは、さは、たしかなる御消息にしなやかなる童の、えならず装束きたるぞ、歩み来たる。円座さし出でたれば、簾のもとに於いて、（小君）「かやうにてはさぶらふまじくこそは、僧都はのたまひしか」と言へば、尼君ぞ、いらへなどしたまふ。

(2)（小君）「……ただ、この御文を、人伝ならでたてまつれ、とてはべりつる、いかでたてまつらむ」と言へば、（妹尼）「いとことわりなり。なほいとかくうたてなおはせそ。さすがにむくつけき御心にこそ」と聞こえ動かし、几帳のもとに（浮舟を）押し寄せたてまつりたれば、あれにもあらでるたまへるけはひ、異人には似ぬこちすれば、そのもとに寄りてたてまつりつ。

(小君)「御返り疾く賜はりて参りなむ」と、かくうとうとしきを心憂しと思ひて急ぐ。尼君、御文ひき解きて、(浮舟に)見せたまつる。

などと語つて来た。わが娘の再来と思つて浮舟の世話をして来た彼女が、「山路の露」で小君と対座して、「たびたびかう山道わけ給ふ御しるしなくてやと、ふるめかしきさしすぎ心、とりどりかたはら痛く思ひ聞こえ侍る」との尼君のことばには、やはり真実味がある。あたかも母親のごとき心が見える。「夢の浮橋」の巻を前提にして、「山路の露」のこの尼君のことばがますます生きてくる。作者はさすがに『源氏物語』に通暁していたことが納得できるであらう。

九 御 髪

尼君まめやかに聞こえ知らせて、しどけなげなるをひきなほしなどし給ふ。なほいとつつましけれど、わが心にもげにかうまでたづね給ふほどにては、つひにかくれなくて、母君など聞き給ひなば、われにかばかりへだてけりと思ひ給はんも、いと苦しきに、さならんさきにほめかしてばや、と思ふをりをりあれば、ただわれにもあらでる給へり。「さらばここにも」とて、少将の尼導き入れて、ひとびとはすべりかくれぬれば、いとうれしうて、まづ御文さし置きて見聞こゆ。いとささやかにおかしげなる御さま、昔ながらのおもかけ、つゆばかり違はぬものから、御髪などのありしにもあらぬ

を見るに、夢かなにぞと悲しくて、よよと泣きぬたり。姫君も行き忘れつる昔のことども、今更おぼし出でられて、まづ母君の行方問はまほしけれど、うち出で給ふべき言の葉もおぼえず。

〔通釈〕

尼君が心からお知らせ申し上げて(浮舟の)乱れている装束などをお直しになる。やはりひどく慎まれるけれども、わが心ながら実にごうまで尋ねなされる間は、ついに隠しきれなくて、母君などがお聞きなされた時には、(母君が)自分にこんなにへだてを置いていたのだと思ひなされるのも、(浮舟は)ひどく苦しいので、(母君が)耳になさる先に(自分の方から)それとなくお知らせしたいものだ、と思う時もあるのだ、ただもう自分が自分でないような状態でおられた。「それではここで……」といつて、少将の尼が(小君を)案内して入れ、他の女房達は身を引いて隠れてしまったので、(小君は)大層うれしくて、まずは(大將殿からの)御文を前に置いて(浮舟の姿を)拝見する。(浮舟の)大層小さくて可愛らしそうな御様子は、昔のままの姿で少しばかりも変わっていないものの、御髪などが以前とはすっかり変わって(尼姿になつて)いるのを見るにつけて、(小君は)これは夢ではないかと思うと悲しくて、声をあげて泣いている。姫君(浮舟も過ぎ去つた昔のことなどを、今更にして思い出しなされて、まずは母君の行方を尋ねたいけれども、話し出す言葉も浮かんで来ない。

〔語釈〕

○さなからんさき——「自分が出家してこうしていまも生きている」

事実を「さ」が指している。現在の自分を母に知られないうちに。
○少将の尼——「小野の妹尼」（僧都の妹）の弟子。

○いとうれしうて——小君の気持ちをいう。「ひとびと」が「すべりかくれ」てしまふと、今は姉と自分の二人の、血を分けた姉弟対面の場となる。小君にはそれが「うれしう」思えたのである。

○御文——薫から預つて来た浮舟への文。

○違はぬものから——「ものから」（接続助詞）は逆接の確定条件を表わす。……ものの……のに・けれどもの意。違わないけれども。

○よよ——しゃくりあげて泣くさま。おいおい。「たれもたれも返

しはせで、よよとなん泣きける」（源氏物語・夕顔の巻）。

○今更おぼし出でられて——今更ながら思い出されて。「られ」（助動詞）は自発の意。

〔補記〕

①「しどけなげなるをひきなほしなどし給ふ」の箇所を、第二類本は、「しとけなき木几引なをしなとし給」と、几帳をなおしたとする。また、『さらばここにも』とて」の箇所、第二類本は欠如。さらに「姫君も行き忘れつる昔のことども、今更おぼし出でられて」の箇所を、第二類は「姫君すこしうち忘れたるむかしのことゝも残れるも、むかひてはさらにおほしいてられて」とする。

②「さらばここにも」について。

本位田重美氏は、『源氏物語山路の露』（一五七頁）で、

「も」は「を」の誤字ではないであろうか。……上に「も」が

あれば、詠嘆表現の来るのが通例であるが、こは「入り給へ」などの命令表現が省略されていると見られる。下に命令、希求、願望表現の来る場合には、「も」ではなく、「を」の来るのが原則だからである。

とされたことを参考までに付記しておく。

③「少将の尼」について。

「小野の妹尼」の弟子。師の妹尼と琴の合奏をすることあり。妹尼の娘婿「中将」がこ小野へやって来て、女（浮舟）のことをあれこれ尋ねたけれども、ことの次第は教えなかつた。が、時が経つにつれていつしか女と中将との間に立つようになっていった。『源氏物語』手習の巻の、秋の小野山荘の日常を語る条において、

昔の山里よりは、水の音もなごやかなり。造りざま、ゆゑある所の、木立おもしろく、前裁などもをかしく、ゆゑを尽くしたり。秋になりゆけば、空のけはひあはれなるを、門田の稲刈るとて、所につけたるものまねびしつと、若き女どもは歌うたひ興じあへり。引板ひき鳴らす音もをかし。見し東路のことなども思ひ出でられて、かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは、今すこし入て、山に片かけたる家なれば、松蔭しげく、風の音もいと心細きに、つれづれに行ひをのみしつと、いつともなくしめやかなり。尼君ぞ、月など明き夜は、琴など弾きたまふ。少将の尼君などいふ人は、琵琶弾きなどしつと遊ぶ。

と語り、また

尼君入りたまへる間に、客人〔中将〕のこと、雨のけしきを
見わづらひて、少将といひし人の声を聞き知りて、呼び寄せた
まへり。

とも語っていた。なお、少将の尼は妹尼の娘在世中は「少将」と
名乗って、女房として仕えていた。

④当然のことながら、浮舟と小君は几帳を境にして対座した。昔な
がらの姿は変わらぬものの、あの美しかったみどりの黒髪が今の
姉にはない。見るや否や小君は「よよ」と泣きくずれた。その声
に姉（浮舟）は、記憶のかたに押しやって来た過去を、ふつふ
つと思ひ返す。まず彼女が問いたいの、薫大将のことではなく
（まして、匂宮のことではなく）、母君のことであった、しかし、
今の浮舟にはその言葉が出て来ない。彼女も心で「よよ」と泣き
くずれていたのである。男女の愛を越える肉親の情を、改めて思
ひ知らされた思いである。

十 伏 目

とばかりためらひ給ひて、「さても世になきものとなりにしを、
たれもたれもさこそ思ひ給ひけめ。せめて憂き身の契りにや、思
ひのほかにながらへて、あらぬ世の心地してこそ明かし暮らしつれ。
おのづから心地もしづまるにそへて、まづ母君の御ことなんおぼつ
かなう悲しき」とのたまひもやらぬに、いと悲しくて、「おはしま
さずなりにし後は、その御なげきに心も違ひ、あやうく見え給ひし

を、大将殿よりさまざまなぐさめ給ひて、『まろなどまでも、いと
ほしうせさせ給ふ御志のかたじけなきになぐさめて、かけとどめた
り』とこそつねにのたまふめれ。されど、なほほけてありし人にも
あらずぞ見え給ふ。かう聞きたてまつりしをり、やがても聞こえま
ほしうおぼえしを、大将殿の『しばしは人に漏らすな』と、かへす
がへすのたまひしかば、え聞こえ侍らぬ』など、をさなげにいひる
たり。「それなんいと口惜しき。かけても知られたてまつらじと思
ふを、いかにして聞き給ひけるにかと心憂きに、あらざりけるさま
にも聞こえなしてよ」とのたまへば、いと難しと思へり。「ただか
く憂きさまにても、母君に今ひとたびあひ見たてまつらんと思ふ。
これを忍びて伝へてよ」と、几帳のそばより文をとり出でてさし置
き給へば、ふところに引き入れて、「ありつる御かへりなくては、
いかにのたまはせん。ただひとくだりにてもたまはりて、帰り侍ら
ん」といへば、「いとうたて、年月のほどに思ひかはり給ひにけり。
かくばかり憂き名をあらぬさまにいひなして、もてかくさんとは思
ひ給はずや」とうらみられて、しひてもえいはず伏目なり。

〔通釈〕

一息お入れになつて、（浮舟は）「それにしても、この世にいない者
になつてしまったのに、誰もがそうお思いでしょう。あまりに辛い
この身の宿命であろうか。思いがけなく生き永らえて、この世なら
ぬ世に生きているような気持ちがして日々過かしているのです。自
然と心がしづまるにつれて、（何はさておき）まず母君のことが気にか
かつて悲しいことです」と、（涙で）いい終えないので、（小君は）ひど

く悲しくて、「(母君が)おられなくなつた後は、(母君は)御嘆きで心も狂い、命も危くお見えでしたが、大将殿からいろいろとお慰めくださって、(母君は)『私などまでも、いとおしんでくださる大将殿の御心のありがたさに慰められて、この世に命をつなぎとめたことです』と常におっしゃっているようです。しかし、やはりぼおっとして以前の母君ではないようにお見えになります。こうして(母君が)無事でおいでになると、耳にいたしました時、すぐに(母君に)申し上げたく思いましたが、大将殿が『しばらくの間は人にいうな』と何度も何度もおっしゃっておられましたので、まだ(母君には)申し上げておりません」などと、子供らしい様子でいっている。(浮舟は)「それこそがひどく口惜しいことです。どんなことがあっても(薫に)知られてはなるまいと思つているのに、どうしてお聞きになつたのかと思つと辛いので、人違いであつたというふうに申し上げてくださいよ」とおっしゃると、(小君は)それは無理なことだと思つた。(浮舟は)「こんな情ない尼姿ではあるけれども、せめていま一度(母君に)お会いしたいと思つています。(だから)これをこっそり(母君に)お渡しください」と、几帳のそばから文を取り出して(小君の前に)さし置きなさるので、(小君はその文を)ふところにしまつて、「私が大将殿から預つて来たあの文の御返事がなくては、どう申し上げればよいのでしょうか。せめてただ一言のお言葉でもいただいて、帰りましょう」といふと、(浮舟に)「ひどく嫌なことに、長い年月の経つうちに(あなた)はすっかりお交わりになりましたね。こんなにまでも、辛い私のことを、うまくとりつくりつて、恥を隠してやろうとはお思いく

ださらないのですか」と恨まれて、(小君は)何ともよいわなないで目を伏せている。

〔語釈〕

○とばかり——ちよつとの間。しばらく。「隅の高欄かうらんにおしかかりて、とばかりながめたまふ。」(源氏物語・須磨の巻)

○せめて憂き身の契りにや——あまりにわびしいこのわが身の運命であるうか。「にや」の下に「あらむ」を省略。「せめて」は普通でない状態をいう副詞。

○なほほけて——「ほけ(呆・耄)て」はこれまでの緊張がゆるんでしまつて、どことなくぼんやりすることをいう。「いとどほけられて、昼は日ひど寝をのみ寝暮らし」(源氏物語・明右の巻)

○かけても——いささかも。かりそめにも。「ただ今は、かけてもいと似げなき御こと見たてまつるを」(源氏物語・若紫の巻)

○知られたてまつらじ——「られ」は助動詞(受身)。「知られ申すまい」の意。

○ありつる御かへり——薫から浮舟への文に対する、浮舟からの返事。

〔補釈〕

①「いと難しと思へり」の箇所を、第二類本は「かたしけなしと思ひ出るに」とする。「いと難し」が「かたじけなし」では意味が大きく変わる。

②「たれもたれもさこそは思ひ給ひけめ」・「思ひのほかにながらへて」・「あらぬ世の心地して」などに関して、本位田重美氏は「右

京大夫集の筆づかひに酷似している」(『源氏物語山路の露』四三頁)ことを指摘された。念のために確認すると、「たれもたれも……」は類似した用例として、

「申ししやうに、今は身をかへたると思ふを、たれもさ思ひて、後の世をとへ」とばかりありしかば……

「あらぬ世の心地して」の用例は

雲の上もかけはなれ、そのちもなほときどきおとづれし人をも、たのむとしはなけれど、さすがに武蔵むさし鎧よろいとかやにて過ぐるに、なかなかあぢきなきことのみまされば、あらぬ世の心ちして、心みむとてほかへまかるに、……

を見ることができ。ところが、「思ひのほかに……」の用例は、「ながらへて」と続くものはないが、

(1)……思ひのほかに物思はしきことそひて、さまざま思ひみだれし頃、……

(2)何事もへだてなくと申し契りたりし人のもとへ、思ひのほかに身の思ひ……

(3)……心強くて過ぎしを、この思ひのほかなることを、はやいとよう聞きけり。

(4)……波に入りにし人の、かかるわたりにあると思ひのほかに聞きたらば、いかに住み憂きわたりなりとも、……

(5)……さるべき人々、さがりがたく言ひはからふことありて、思ひのほかに、年経てのち、……

と五例を数えることができる。つまり、「たれもたれも……」「あ

らぬ世の心地して」はさておき、「思ひのほかに……」は本位田氏の指摘されたごとく、『建礼門院右京大夫集』特有の筆づかいと考えると、『山路の露』の筆づかいが「酷似している」とすることはできるはずである。

③「大将殿のしばしは人にもらすなど……」について

『源氏物語』夢の浮橋の巻で、薫が小君を小野の山荘に遣わす折に、

人聞かぬ間に呼び寄せたまひて、「あこが亡なせにしいもうとの顔はおぼゆや。今は世に亡なき人と思ひ果てにしを、いとたしかにこそものしたまふなれ。うとき人には聞かせじと思ふを、行きて尋ねよ。母には、まだしきに言ふな。なかなかおどろき騒がむほどに、知るまじき人も知りなむ。その親の御思ひのいとほしさにこそ、かくも尋ぬれ」と、まだきにいと口がためたまふを、……

ときびしく口止めしていたことを語っている。

④「小君」について

『源氏物語』には「小君」と呼ばれる人物が二人登場する。一人は中納言兼衛門督の末子で、空蟬の弟、いま一人は常陸介の子で、浮舟の異腹の弟である。いま登場する「小君」は当然後者である。浮舟が宇治にいた頃、母とともに宇治に赴いたこともあったが、浮舟失踪後は、特に容貌が整っていたこともあって、薫のもとで召し使われることになった。翌年夏、薫が横川に登る折に供をし、帰邸後は薫の文をたずさえて小野に向かった。だが、姉は会って

くれず、持参した薫の文の返事も拒んだので、仕方なく下山したのであった。

(1) まことには例の「こなたに」といはせられたれば、歩み出でて、簀子の端つ方につるたり。(八 簀子)

(2) 「……帰りまるまじうなん承り侍りつる」といふさまも、いとらうたげなり。(同)

(3) 「……いとうれしうて、まづ御文さし置きて見きこゆ。(九 御髪)

(4) 「……御髪などのありしにもあらぬを見るに、夢かなにぞと悲しくて、よよと泣きぬたり。(同)

(5) 「……かへすがへすのたまひしかば、えきこえ侍らぬ」などをさなげにいひるたり。(十 伏目)

(6) 「……もてかくさんとは思ひ給はずや」とうらみられて、しひてもえいはず伏目なり。(同)

と、『山路の露』に語られたこれまでの「小君」の姿を追ってみると、幼くていまだ十分な使者としての役目を果たせない感がする。だが、それでも一心に役目に徹しようとするけなげな姿が、まざまざと浮かび上がって来る。やはり、作者には「女性」を想定するのがより妥当であり、かつ、弟を持つ女性(姉)であるといえそうに思われる。特に、(6)における姉から「うらみられて」も一言の返しもせず、「伏目」になっている小君の姿には、ひたすら姉を慕う弟の心が強く感じられる。

⑤ 浮舟の発言に関して。

(1) 「それなんいと口惜しき。……あらざりけるさまにもきこえなししてよ」

(2) 「いとうたて、……かくばかり憂き名をあらぬさまにいひなしと……」

と二箇所「なす」を使用している。小君の口を通して、事実をいささか歪めてでも伝えてほしいと望むところに、この時点における浮舟のありようが窺えるであろう。